
You idiot!

紅月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You idiot!

【Nコード】

N7803J

【作者名】

紅月夜

【あらすじ】

時間軸としては、一護達が虚圏に行った後から、空座町が尸魂界に送られる前まであたりです
夏梨が見たい読みたい書きたいで書いた為、支離滅裂なのはご容赦を

「あれ？あそこにいるのってー……」
夏梨の視線の先には、電柱……いや、正確には泣いている女の子の幽霊を見ているたつきの姿があった

「たつきちゃん……」

弾かれたように振り向くたつき

「あ、えっと、夏梨ちゃん？どうした？こんなところで……」
たつきは、慌てたように言った

「……たつきちゃんも幽霊が見えるの？」

夏梨の問いかけに、たつきはいっそう慌てた
「ゆ、幽霊なんて見えるわけじゃないじゃんっ！！大体そんなものいるわけー……って、も？」

「私は幽霊が見えるよ……たつきちゃんは？」

夏梨の再度の問いかけに、たつきは観念したかのように答えた。

「夏休み前あたりからかなあー……はじめはぼんやりと、……段々、はつきり見えてきてね

今では触れるし、喋れるんだ……」

「………だったら、あんまり幽霊が一杯いるところとか、行かない方がいいよ」

「え？」

ホロウ
「虚っていうさ、悪霊みたいなのがいるんだ

幽霊が見える奴とか幽霊自体をよく襲うらしいから」

たつきは初めて聞く名に、戸惑いながら、聞き返した

「虚？」

「そ。仮面つけた化物みたいな奴」

何か思いあたることがあるのか、たつきは夏梨に少し詰め寄った
「もしかして、一護が黒い着物着て戦ってる奴？」

詰め寄られた夏梨は、たつきの言葉に目を見開いて驚いた

「え？ たつきちゃん、死神姿の一兄を見たことがあるの？」

「あるよ……。でも、死神って？」

「アタシもよくは知らないんだ……観音寺のおっさんにきいただけだし……」

夏梨はたつきにドン・観音寺から聞いたことを教えた

「一護のヤロー、一人でしょいこみやがって」

夏梨から全てを聞いたたつきが毒づくと、同調したのか夏梨も愚痴りはじめた

「ホント。いなくなる時ぐらい言えばいいのにー……」

「基本的に馬鹿なんだよ、あいつは」

「巻き込まないようにしてるんだろうけど、逆に迷惑。」

「帰ってきたら、一発殴ってやる!!」

「じゃあアタシは蹴りいれよう」

二人は顔を見合わせ、同時に笑いだした

「一護いつ帰ってくるのかなあ……」

「浅野さん、それ何回目ですか？」

啓吾の発した呟きに、水色が敬語で返すと、啓吾は後ろに『ガーン』

という効果音がつきそうな様子で叫んだ

「敬語イヤアアア!!」

「うるさいですよ浅野さん」

水色が間髪入れず返すと、啓吾は今度は水色の前に走って回り込んで叫んだ

「敬語イヤアアアア!!!!」

水色は手元の携帯をいじりながら、叫んだまま動かない啓吾の隣を素通りした

「無視!!? 無視とかありですか!?

ご免水色!! オレが悪かったから、無視とかしないでください!」

またもや水色の前に回り込んで、今度は土下座した啓吾の頭を踏みながら、水色は口を開いた

「一護なら絶対帰ってくるよ

チャドも石田君も井上さんも

みんな、無事で……」

啓吾は、自分を踏んでいる力が弱まっているのに気付きながら、敢えて体を起こさずに、目線だけ上げて応えた

「そうだな

一護には帰ってきた瞬間に速攻謝ってもらわなきゃならないんだ
それで、全部話してもらわなきゃな」

水色は何も言わずに啓吾の背中を踏んで進み、曲がり角を曲がった

「お、置いていくなよ水色」

啓吾は水色を追いかけて角を曲がった

その瞬間、胸に何かとぶつかった衝撃がして、後ろに少しよろめいた
「イテッ

何だよ水色、急にとまるなよ」

「あれ？水色と啓吾じゃん

こんなところで何してるの？」

角を曲がったところには女の子が二人いた

「有沢さんと……えっと……」

水色がもう一人の女の子の名前を思い出そうとしていると、啓吾が後ろから覗き込んで指をさして叫んだ

「えっと……あれだ……一護の双子の妹の片割れ！」

水色はうざそうに、啓吾の指を払いのけると、啓吾を見上げて軽く睨んだ

「それくらいわかってますよ浅野さん

大体、人を指さすなんて駄目だって知らないんですか？」

水色に睨まれ、且つ敬語で返された啓吾は再び叫んだ

「敬語やめてええ！！！」

「啓吾うるさい

この子の名前は夏梨ちゃんよ」

たつきは喚く啓吾をうっとうしそうに睨んで、まだ名前を思い出せていなかった水色に夏梨を紹介した

「さつき啓吾が言ったけど、一護の双子の妹の片割れ

もう一人は遊子ちゃんっていうんだけど、朝とか、会ったことあるんだっけ？」

そっちのほうが見た目は一護に似てるかも

性格は夏梨ちゃんのほうが似てるけどね

「……………それで、あの姿の一護のことを知ってるんだって」

「あの姿って？」

水色が、たつきの台詞の最後にひっかかりを覚えて問いかけると、簡潔に夏梨が答えた

「黒い着物着て、刃物振り回してる姿」

きっとこの場に一護がいたなら、この冷めた妹に全力で突っ込んでいるだろうと、たつきと水色は同時に思った

「……僕が見たのは、黒い着物を着て、白い何かを背負ってる姿だけだよ」

「その“白い何か”が刃物だよ」

水色のちよつとした訂正を、夏梨は一蹴し、さっきたつきに言ったことを、もう一度二人に説明した

「あの怪獣みたいなのって襲ってくるのか……」

「前に浅野さんが言ってた奴ですよ」

「何でまだ敬語!？」

夏梨の説明で“虚”の存在と、襲ってくるということを知った二人は、少し驚いた

「あ、じゃあさ、アフさんにも聞いてみようぜ」

水色に敬語で返されたショックから立ち直り、啓吾は一つ提案をした
「アフさん？」

「誰それ」

聞いたことの無い名に、夏梨とたつきは揃って首をかしげた

「前、啓吾が言ってた“アフロのオジさん”のこと？」

ただ一人、水色だけが啓吾の示した人物に思い当たり、啓吾に聞いた
「そうそう」

一護と同じ黒い着物を着て、腰に刀を差してたから、たぶん死神だ
と思うぜ」

夏梨とたつきは、何処かで見たことがある気がするなあと思いながら、でも何処で見たんだろうと思ひ出せないまま、夏梨が口を開いた
「で、その人何処にいるの？」

夏梨に問いかけられ、啓吾は口を“あ”の形に開いたまま固まった
「浅野さんって基本、馬鹿ですよ」

「たまには考えて物言えば？」

水色とたつきに責められ、啓吾は電信柱の影でいじけ始めた
すると、夏梨が「あ！」と声を上げ、たつきを見上げた

「この女の子の幽霊を使えばいいんじゃない？」

夏梨が説明した作戦は……

死神は“魂葬”と呼ばれる、除霊行為をする
なら、この女の子の幽霊も“魂葬”しに来る筈
それを、四人で待ち伏せしよう

……という、至極簡単なものだった

「何だかすごくあの女の子の幽霊に申し訳ないんだけど、背に腹は
変えられないしね」とは、たつきの言。

兎にも角にも待ち伏せを始めて数時間

ある程度、空が暗くなってきた頃

夏梨が口を開いた

「……………そもそも何で待ち伏せしてんの？」

「……………え？」

たつきは固まり、水色は「言い出したのは浅野さん」と責任放棄を
した

当の啓吾は？を頭の上に浮かべて、首を傾げた

「だから、その“アフさん”っていう死神を捕まえてどうするの？」

夏梨が啓吾に聞くと、啓吾は未だ？を浮かべたまま答えた

「どうって……………」

啓吾は漸く夏梨の言いたいことが判り、一人で大騒ぎを始めた

「うおおお！！ホントだ！！どうしよう！？ねえ、どうしよう！？アフさんに会えても俺どうしたらいいかわかんないよ！？ねえ水色どうしよおぶっ」

「啓吾うっさい！」

明らかに近所迷惑な啓吾をたつきが殴って黙らせ、パンパンツと手を叩いた

「とりあえず、目的無いまま集まっても仕方ないでしょ

今日はこれで解散！また後日、どうするか決めよ

夏梨ちゃんもあんまり遅くなると、遊子ちゃんが心配するだろ？」

「……………うん、そうだね

ただでさえ、一兄が居なくてよく夜に泣いてるのに」

自分のことで泣かせるわけにはいかないと、小さく呟くと、たつきの正拳をくらって沈んでる筈の啓吾が、がばっと起き上がった

「一護の奴！妹泣かせたのか！！帰ってきたら絶対一発殴ってやる

……………」

「あれ？浅野さんってそんなキャラでしたっけ？」

「うるせえ！！敬語ばっか使いやがって！」

啓吾はそう叫んだ後、小さく続けた

「俺も、妹じゃないけど、姉ちゃんがいるからさ、思うんだよ

姉ちゃんには何があっても泣いて欲しくないって……………」

だから、一護の妹にも泣いて欲しくないなあって」

若干うつ向き加減に呟かれたその言葉に、水色は容赦無く突っ込んだ

「浅野さんがそんなこと言うなんて、正直キモいですよ」

「ひどいっ！！！！人がせつかく真剣に語ったのに！！」

半泣きで啓吾が叫ぶと、たつきも突っ込んだ

「慣れないことはするもんじゃないよ、啓吾」

「有沢まで！？」

完全に泣いて叫ぶと、夏梨も突っ込んだ

「なんて言うか………くさい？」

啓吾がまたいじけ始めると、夏梨は少し恥ずかしそうに言った

「でも、ま、ありがとう

一兄が帰ってきたら、聞かせてやりたいよ

………ああ、一兄のこと思い浮かべただけで、腹立ってきた
帰ってきたら、絶対蹴ってやる！！」

「私は絶対殴る」

「俺も殴る」

「……じゃあ、僕は踏もうかな」

「」「………え？」「」

(後書き)

お久しぶりです、こんにちは(?)

最後のオチについてですが……紅月夜の中では、“水色Ⅱ踏む”なんです(――;))

漫画の中とかでよく啓吾を踏んでいるので、一護も踏まれればいい
と思って……!!

あとは、夏梨ちゃん

夏梨が書きたくて書いた筈なのに、あんまり夏梨が居ないっていう・
・!!

夏梨はやっぱり難しいなあ

いつかまた、夏梨が出てくる話を書こう……

ここまで読んでくださって、ありがとうございましたm () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7803j/>

You idiot!

2010年10月9日01時22分発行